

## フリードリヒ・リストの歴史認識について(口)

—リスト「農業・工業・商業の關係ならびに古代の經濟史に關して」—

住 谷 一 彦

- 一 問題の所在
- 二 匿名氏のリスト批判
- 三 農業と工業の因果關連
- 四 イギリス近代史の分析視角(以上、第一五卷一号所載)
- 五 生産力における東方古代と近代ないしヨーロッパ
- 六 古典古代の位置づけ
- 七 リストの歴史認識の構造

五 匿名氏とリストとの対立は、これまでの叙述からも明らかなように、両者の抛って立つ階級の經濟的利害の對立ならびにそれに相即する祖国の現状についての判断の相違によるものであった半面、また歴史の發展に關する両者の歴史認識の差異にもとづくものであった。したがって、匿名氏はリストの所説を現状分析および近代の史實に關する実証的批判にのみとどめず、より根源的にリストの歴史認識の抛って立つ論拠の總体を打ち破るべく、近代より

遙か古代の歴史にまで遡っていく。匿名氏はいう。「リスト博士は古代国家について全然関知することがなかった。このことによっても彼の根拠とするところのもの〔がどんな程度か〕を容易に見抜くことができるというもののである。すなわち、古代国家の歴史によって、リストの体系は崩れ去ってしまうからだ。ギリシャは文明のある高さを示したばかりでなく、また芸術の目もくらむばかりの開花、弁論術、武の天才、稀にみるほどの国家理性、最高の哲学、最も自由な諸制度をも呈示したのである。リスト氏が『工業の唯一の果実であると思った』すべての美と偉大さがそこに花咲いていた。ただ工業だけがなかった。ギリシャはこのすべてを農業と商業とに感謝すべきである。古代エジプトは農業だけの国であり、いくらか商業をも営んでいた。バビロニアも農業だけだし、ローマはサビーネ族から農業を学び、これを媒介にしてイタリアを一個の農園ガムラに改造した。ヴェニスも文字通りの商業国であったといえようし、スペインは農業と商業とだけで豊かになり、かつまた強大となった。ドイツ、イギリス、フランスとも同様である。なるほどフランスは一八世紀中葉に（いわゆるコルベールの時代に）工業を保護したが、しかし『その力と榮光とは、むしろ土地所有貴族に感謝すべきものである』。皇帝時代まで工業家層は従属的な役割を演じたにすぎない。イギリスの勢力は地主層のうえにやすらうものである。政府が借款を必要とするときには、工業家層にでなく、ひとり地主層にのみその資金源を見いだすのである。<sup>(1)</sup>」

匿名氏のリスト批判は、こうして古代までも包括する広大な歴史を舞台にくりくりひろげられることによって、いまやリストとの対立はいよいよ鋭くされていくことになった。だが、リストのみるころでは、匿名氏の批判はその視野を拡大させることによって、その誤謬をもまた一層拡大再生産することになった。というのは、こうである。匿名氏のみるところでは、リストの「国民的体系」のなかで歴史発展の原動力を工業力に求めたのは明らかかな誤りである

が、それは実はリストがもっぱらヨーロッパ近代史に史実の拠りどころを求めた点にあり（匿名氏によれば、それすらも間違いだらけの見解なのだ）、古代を含めないで性急に歴史を整序したその視野の狭さに起因していると思われたからであった。だから、匿名氏は古代の史実を導き入れることによって、リストの見解の誤りを一層明確に示すことができるのみたのである。しかし、リストが「国民的体系」で主張の根拠をもっぱらヨーロッパ近代史の裡に求め、古代経済史を敘述の対象からはずしたのは、匿名氏の考えた以上にさらに深い理由があったことであつた。なるほど古代世界は蒸気力や複雑な機械を動力とする工業といったものは全く知らなかつたけれども、しかし、そのことによって古代は農業と商業のみで発達し、工業はなかつたか、殆ど無にひとしいくらいであつたという風にきめつけてはならない。リストのみるどころでは、匿名氏のように結論する前に、実はもっと究めておかなければならない問題がある。それ故にこそ、リストはあえて古代史を彼の敘述の対象からはずしたのであつた。では、どのような問題がそこに潜んでいたのであらうか。リストは、それを古代と近代との拠つて立つ経済的基盤が全くちがっていたという点に求めるのである。この点はリストの独自の歴史認識の根本にかかわる重要なところなので、つきにしばらくリストの説明をきくことにしよう。彼のみるどころは、こうである。

「文明によって富と勢力とに秀でたところの最古のすべての民族は、近代の文明諸民族とは主として彼らが住んでいた土地の自然な、異常なまでの豊饒性によって区別される。もしわれわれが古代の著者たちの言になにほどの信ぴょうさをおこうと欲するならば、古代インド、エジプト、バビロニアは、現在のイギリス、ドイツ、フランスよりも比較にならないくらいに地味が肥沃であつた。プリニウスはエジプトの〔単位面積当りの〕收穫量は〔播種量の〕一〇〇倍、ビザンチンおよびアフリカのある地方では一五〇倍とみつまっている。ワルロはシリアについて一〇〇倍、エ

トルリアでは二〇から三〇倍とみつもり、ヘロドトスはリビアとバビロニアについて二〇〇から三〇〇倍と見てい  
る。まだ農業が低い発達段階にあったその当時のヨーロッパにおけるよりも、これらの国々における収穫量が一〇倍も  
豊かであったということは、この評価がたとえ誇張されているにしても、やはりつねに認めておくべきことなので  
ある。そこでは自然がすべてを与えたのだ。灌漑施設を除くときには、資本の投下はほとんどゼロに近かったし、収  
穫に比例してそれに必要な労働はまったくに足りないくらいであった。近代の文化諸国では、それに反して数世  
紀前までは三ないし四倍以上はとうてい穫れなかつたし、もっと多く穀物を得ようとすれば、土地により多くの労働  
と資本を投じることによってもぎとられなければならなかつた。それにもかかわらず、今日でもまだ近代文明諸国  
の〔土地の〕生産性は、古代諸国のそのの一〇分の一にも達していない。この相違から、以下の重要な帰結が導きださ  
れてくる。古代の諸民族は灌漑という事業をのぞくならば、大量の人間を養うために技術発展上のいかなる高い水準  
をも必要としなかつた。この人口の一〇分の一は技能・経験・労働をさほど多く消費することなく、その他の一〇分  
の九の人口を養うことができたし、だからこそ一方ではこれらの人々が戦争や寺院の勤めにしたり、あるいは  
いたずらなる怠惰に身をついやりたりすることもできたのである。こうして、それらの国々でカスト制度が形成さ  
れ、それによって多くの無為の徒が額に汗することはますます少なく生活するに至つた。しかし工業の農業に対する  
影響は、われわれの時代におけるようにそれほど大きく現われることができなかった。というのは、農業で使用  
された農器具はすぐれて簡単なものであつたし、下層のカストは生活上の楽しみ増大、財産の蓄積およびそれから  
芽生える勤勉・節約・進歩への顧慮によって刺戟されなかつたからである。それに対してヨーロッパでは、土地から  
の収穫がさらに少なかつただけに、工業は農業に対して一層重要な意義をもって作用をおよぼしたのであり、諸

マニファクチャ

マニファクチャ

民族の進歩は、たとえ遙かに困難かつ緩徐であったとはいえ、古代の諸民族における場合よりもずっと永続して裕福な状態をもたらした。なぜならば、少量の土地の与える収益は生産者の、非生産者に対する関係を一層多く好都合にしたし、労働は次第次第に自由となり、土地所有も私的所有となったし、資本蓄積の必然性と改良された器具ならびに方法の優越さは、さらに多く勤勉・節約・文化の改善へと駆りたてる結果となった。古代では農業生産の余剰は大部分「生産者に」等価をもたらしたり、その状態の改善を可能にするようなことを生じさせることなく、無為の徒を養うのにさざげられたのに反して、近代では「そうした」余剰は農業においては自由な労働と土地の私的占取のもとに、一層住み心地を良くするために家財や農器具・衣服などを多くし、改良し、また彼の占有する土地の収益を高めるために必要な手段を講入するものに向けられた。こうした状況のもとで、はじめて「近代では」工業が古代におけるとは比較にならぬほど農業に対して多大の影響をおよぼした所以を理解することができる。<sup>(2)</sup>

以上やや長きに失するほどにリストの説くところを引用したのは、実はこのなかにリストの歴史認識の基礎視角がきわめて明瞭に示されているからにはかならない。彼はそれを東方古代と近代ないしヨーロッパとの比較というかたちで展開する。すなわち、東方古代の経済はその究極の抛りどころを土地の異常なまでの肥沃さにおいていた。<sup>(3)</sup>そこでは、リストの少しく誇張した表現にしたがうならば、自然に多少の人力を加えるだけで人口の一〇分の九を養うに足りたくらいであった。このような自然の肥沃さは農業上の生産用具をも長期間にわたって簡単な原始的なレヴェルにとどめてしまうことによって、そうした労働手段を生産する工業部門の発達をも低い段階に抑えてしまう方向に作用した。もちろん、リストは東方古代における社会的分業の発展が相対的に低い段階にとどまった所以を、こうした土地の肥沃さだけに求めていたのでは決していない。土地の肥沃さがそうした方向に作用するにあたっては、他面社会的

な諸要因が協働したのである。リストは、その場合とくにカスト制度の形成を重視している。<sup>(4)</sup>カスト制度の形成もまた、その由来を辿っていくならば、結局は土地の肥沃さに起因する土地生産性の高さと、したがってまたこの場合にはそれに反比例する労働生産性の低さとに帰着するのであるが、ともかくカスト制度は一端成立したのちは、それに寄生する多くの人口がその社会に生じる余剰生産物をいたずらに喰いつぶし、かくて再び生産に投下する部分を少なくするとともに、他面下層のキャストをして、「生活上の楽しみのみ増大、財産の蓄積およびそれから芽生える勤勉・節約・進歩への顧慮によって刺戟」をうける機会を少なくすることによって、従来どうりの生活(＝単純再生産)に甘んじるほかない状態に追いやったのである。こうして、カスト制度は前述の土地生産力の要因と協働して、全体として東方古代の経済を停滞させる方向に作用した。ところが、ヨーロッパでは事情は「正に逆」であった。ここでは、土地の地味はやせており、収穫は額に汗する激しい労働の結果であった。自然のままでは良質の耕地が少ないという歴史的な事情は、生産者(＝農民)の社会的な重要度を高めるとともに、<sup>(5)</sup>また労働を自由にし土地の私的所有を成立させる方向に作用した。自由労働と土地の私的所有にもとづく独立自由な農民層の形成は、その内部に資本蓄積の必然性と絶えまない労働要具・方法の改善への意欲を芽生えさせ、勤勉・節約といったすぐれて生産力的なエートスを鍛えあげることになる。<sup>(6)</sup>こうして、近代では農民層のあいだに作りだされる余剰部分は国家経営の改善と収益の増大に必要な資財・要具その他の手段の購入に再投下されるのである。この場合、彼らの手元に蓄えられる余剰生産物(＝富は、労働用具その他の「購入」のために、すでにあらかじめ貨幣形態をとっていなければならないであろうから、リストのこの部分に関する敘述から、われわれはこれらの農民層がこの段階ではかなりの程度にまで商品＝貨幣経済の網の目にまぎこまれていること、いいかえれば一面では独立の商品生産者であることをリストが念頭におきつつ論じ

ていると推定してよいようにも思われる。<sup>(7)</sup>ともかくリストは、このように東方古代と近代ないしヨーロッパを比較対照させることによつて、意識の奥深いところにあつて彼の独自の歴史認識を支えている視角ないし方法を、まざまざと浮彫りにしてみせたのであつた。そうした彼の歴史認識の基礎におかれた問題視角こそは、生産力の発展という観点から世界史を把握することであり、とくに近代的生産力の歴史的形を農業生産力の質という面でつかむことであつた。ここには近代的生産力の特徴を工業力において理解する「国民的体系」の立場が一層深められて、そうした近代に独自の工業力の形成が、実はそれ以前に中世の西ヨーロッパに特有な歴史事情にもとづいて成立した農業力の特質によつて深く規定されているという認識にまで至っている事態が、はっきり表明されているのである。<sup>(8)</sup>

ところで、リストが、このような東方古代と近代ないしヨーロッパとを比較対照させることによつて、近代に独自の生産力の歴史的性格もしくは構造を明らかにしようと思つた場合、当然に問題となつてくるのは古典古代をどのよふに世界史の発展の裡に位置づけるか、ということがらである。事実これはおよそそうした世界史を構想しようとする場合には、くりかえしてつき当る困難な問題であり、<sup>(9)</sup>リストもまた彼なりにそれについて興味深い考慮をはらっている。したがつて、つぎにリストにおける古典古代の理解の仕方について若干の検討を加えておきたい。

(1) F. List, Werke, V. SS, 449—450. 国家ないし都市の興隆を農業および商業の発達という観点から説明する匿名氏の見解は、当時リストのそれよりも一般的で(少なくともドイツでは)あつたといえよう。たとえば、リストへの影響という点では思想上とくに重視されてよいメーザーの場合でも、ニュアンスにおいてかなり異なつていとはいへ、やはり同様な主張がみられる。ただし、彼の場合商業と工業に繁栄の基礎をおいていたオランダと、「農業が商業をとまなわずに宮まれている」(Justus Möser, sämtliche Werke, von B. R. Abeken, 1812, vol. II, 138f.)ポランダとを比較して商業の重要性を強調する点で独自なものがあり、彼のこうした見解の背後にハンザ諸都市の強大な勢力に対する認識がひそんでいたのであ

らうとのツイン・マーマンの推定は、おそろしく肯定してやうである。Vgl. Heinze Zimmermann, Staat, Recht und Wirtschaft bei Justus Möser, Jena 1933, S. 75, 77. したがって、メーサーとリストとの思想上の関連についてはなお充分にたち入った検討を必要とするように思われる。この点は、後段において改めてふれることであろう。

(2) List, Werke W. SS. 450—452. この箇所は、すでに小林昇氏によっていち早く紹介されている(同氏「フリードリヒ・リストの生産力論」、東洋経済新報社、一九四八。一四二—一四四頁)。一言つけ加えるならば、この箇所の理解の仕方について、筆者は小林氏と異なるところは全くない。ただ、小林氏の説明がそこで終つてゐるのに対して、筆者の解釈は実はそのあとにつづくリストの行論も含めてたてられているので、リストの歴史認識に関する理解について全体としてなほどこ相違が生じてくることになる。

(3) リストが述べている東方古代諸国の収量の当否については、小林氏も確め得なかつた旨を註で記しておられるが、筆者もこの論稿を書きあげるまでには充分な資料を入手できなかった。ただ、飯沼二郎「農業技術序説」(「人文学報」一四号、一九六一)は、そうした「自然」の問題をきわめて巨視的な観点から扱って、いくつかの興味深い論点を提示している。ついでながら、リストが東方古代諸国における生産力発展の停滞性を土地生産力の低さの問題に究極的には帰着させながら、そこでは灌漑施設だけが唯一の投資対象たり得たと述べている点は、その後の研究史でこの問題がクローズアップされてきただけに、彼の史眼の鋭さが示してゐると見えよう。Vgl. J. Steward, Irrigation Civilization, Washington, 1955.

(4) リストが東方古代の社会構造を「カスト制度」として特徴づけたのは、あるいは「ロドトスの敘述を抛りどころにする当時の市民常識に従つたものであるかも知れない。なお、マックス・ヴェーバーは、それにふれて若干の批判を加えている。「エジプトに『カスト』が存在したとはながいこと信じられてきたところである(とくに「ロドトスを典拠として)。……しかし、ここでは」職業の世襲性は、宗教的「不浄」の觀念が職業と結びついていない結果として、通婚 *connubium* の禁止の意味でのカスト形成をも意味しなければ、また職業のメンツト的封鎖性の意味でのカスト形成をも意味してゐない」のである」。Vgl. M. Weber, Agrarverhältnisse im Altertum, in: Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 1924, S. 76. (渡辺・弓削訳「古代社会経済史」、東洋経済新報社、一九五九。一四二頁)。ただ、ここでの問題は、むしろあたつて、そうした点の当否にあるのではなくて、リストがカスト制度でもって東方古代を特徴づけ、それによって、近代ないしヨーロッパの社会構造をはっきりと区別し、いいうべくば生産力の発展段階がまったく異なつてゐることを強調している点である。

(5) マックス・ヴェーバーは、ヨーロッパの有蓄農業が森林の開墾によって形成された歴史的事情を決定的に重視している。(たとえば、『東方古代の Bewässerungskultur 』とヨーロッパの Waldkultur を対比させる仕方を想起せよ。Weber, Wirtschaftsgeschichte, 1924, S. 64. 黒正・青山訳「一般社会経済史要論」(上)、岩波書店、一九五四。一四五頁)。なお、古代末期における北方への内陸植民と、それが農民層の経済的比重を高めていく方向に帰結した諸理由については、ヴェーバーの前掲「古代農業事情」のおわりにみられる古代と中世に関する有名な比較論を参照。

(6) リストがここで強調しているのは、東方古代と比べて近代ないしヨーロッパに独自の農業力の性格は独立自由な農民層によって担われた点にあり、それは労働の自由と土地の私的所有(≡経済の独立)に立脚していたということ、および、こうした客観的条件の存在を前提として、はじめて一方では労働生産性のめざましい向上、他方ではそれを内側から支える勤勉・節約・周到といった生産力的な近代的諸徳性の形成が可能となるのだということ、である。近代的生産力形成史に関するこうしたリストの理解の仕方は、おどろくべきほどに大塚久雄氏の所説との一致をみせている。たとえば、同氏「生産力における東洋と西洋」(『近代資本主義の起点』所収、学生書房、一九四九)の行論を参照。だがこの点は、すでに小林氏がいち早く注目したところでもあった(小林「前掲書」一四七頁)。ここでは、しかし、リストがそうした客観的諸要因の存在を指示しつつ、しかも彼の関心がとくに生産力の主体的要因である労働力の質の問題に向けられている点に、行論上とくに留意しておきたい。

(7) リストの叙述では、この点は必ずしも明確ではない。その理由はおそらく後述するような事情にもとづくものと思うが、しかし、この場合リストが事実上封建社会解体期の農民層を脳裡においていることは、行論の前後の文脈から明らかであるところである。ただ、リストにはヴェーバーのような「特殊近代的」spezifisch moderne といった用語法は存在しないのであって、筆者の興味も、ある意味ではそうした点についてのリストの歴史認識の構造の理解に向けられているといってもよいであろう。

(8) もしあたって止目すべきことがらとしては、一つは近代的農業力は近代的工業力の影響の下で成立したのであったが(ist, Nationalsystem, S. 304.)、<sup>1)</sup>「これと同時に、この近代的工業力自身を生んだ特定の歴史的主体は、ヨーロッパに固有な貧しい土地の生産力に対抗しつつ自らを能動的・合理的・計画的性格に形成した、特定の類型を持つ人間によってはじめて成立し得たとされる」(小林「前掲書」一四六頁)ことであり、もう一つはリストの場合、そうした近代的生産力を特徴づけるところの工業力そのものを規定する農業力が、いってみれば近代に独自の、spezifisch moderne というかたちではなく、むしろ古代に対比して西ヨーロッパの農業力として把えられている点である。問題のこの側面については、なお後段で少しく立ち入って

述べることにする。

(9) 戦後わが国の歴史学界で盛に討議された「世界史の基本法則」(その起点としては、歴史学研究会編「世界史の基本法則」一九四九)をめぐる論争を想起されたい。この点は、しかし単にマルクス主義史学においてだけの問題では、もとよりない。世界史の全貌を総括しようという試みのうち、戦後最も注目すべきものの一つは、フリッツ・ケルン Fritz Kern の編集にかか  
る *Historia Mundi*, IObde., Bern 1952—1961. であるが、古典古代が始めて登場する第三巻は、『Der Aufstieg Europas』と題されており、その序文 (Fritz Vajavac による) には古典古代をむしろヨーロッパに包摂して一個のヨーロッパ文化共同体の一環として理解しようとする意欲が強くなぎっている。なお、安藤英治「クリストファ・ドーンソンにおける歴史意識について」(『政治経済論叢』七ノ三)、フアンリ・ピレンヌの文化断絶説に関する一研究(同、八ノ一、三)、「ロストフツェフの古代社会研究の一断面」(同、一一ノ一)の一連の研究は、近代的エートスの根源を深くヨーロッパ文化世界の形成過程の裡に求める構想に貫かれており、その点で本稿のテーマにつながるものがある。

六 東方古代と近代ないしヨーロッパの対比というかたちで近代、というよりむしろ西ヨーロッパ的な生産力の歴史的、性格を鋭く問題の前面に押しだしてきたリストは、古典古代の特質についても、つぎのような興味深い見解を示している。すなわち、「ギリシャ人およびローマ人の場合には、カスト制度の代りに奴隷制が登場する。そこでは各家族は経済についてはほとんど独立して存在し、自らのなかで完結した国家を形成していた。一個の家族という概念のもとに、われわれは若干数の奴隷をも理解する。それは完全な一個の世帯にとって不可欠なものであった。こういう完全な一世帯においては、農業生産に関するあらゆる必要ばかりでなく、またあらゆる農器具および日常の衣服類もが生産されていたし、音楽家・芸術家・教師・書記の一部が奴隷であったことも、アッティカのキケロの書簡から読みとることができる。こうした事情のもとでは工業が農業に(「ヨーロッパの場合のように」)大きな影響を有し得なかつたばかりか、むしろその逆であることも把握できるのである。裕福なローマ人がもっていたような高級な財貨の生産

が、ごくわずか市場に依拠していたにすぎず、その他の大部分は各家の農業および工業に彼らの共通の主人によって使役されている奴隷たちで費消された。したがって、これら諸民族が、われわれの場合におけるように高度にはもちろんないが、彼らの場合においても有していた工業マニファクチャに一定の重要性を与えなかったことは、わりに容易く説明できるのである。<sup>(1)</sup> それにつづいて、リストはヘーレンの古代に関する敘述を引用しつつ、ギリシャ・ローマのみならずバビロニアはただ農業を、エジプトもただ農業と若干の商業を有していたにすぎないという匿名氏の見解を実証的に論駁し、東方古代の工業が充分に高度に発達していたこと、その点では「エジプト人は、古代世界のイギリス人であった」という評価を下している。<sup>(3)</sup> それに対して、「ギリシャは古代世界における北アメリカであり、近世でいえばヨーロッパである」とみる。リストによれば、古典古代はさまざまの意味で東方古代から近代ないしヨーロッパ世界への橋渡しの過渡的段階に位置していた。すなわち、「国家組織・法制・芸術・科学などと同様に、その神々も移住者もアジアおよびエジプトから由来するものであった。新しい処女地で文明のあらゆる根本的に新しい芽が、古い国家の土壤におけるよりもさらに豊かな完成した実を結ぶに至ることは、事物の自然に属している。われわれはすでにこれに関するものもろの根拠を別のところで開陳した。<sup>(原註)</sup>ギリシャは古代世界の文化が西ヨーロッパに渡来したところの橋であったのである。カスト制度は、この土壤の上では自らを維持できなかつた。祭司カストは戦士カストの下位になつた。多数の自立せる国家が成立した。そして、土地の耕作がユーフラテス河やナイル河の沿岸におけるよりも限りなく多く汗の結晶であることを要求したという事情は、すでに自由な共同体 *Gemeinwesen* の成長に有利であつた。ギリシャということであれわれはアッティカとアテーナイを考えているのであるが、さらにいうならばヘレーネの最も文明の発達した、富裕で強大な共同体 *Gemeinwesen* を語っているのである。すべての新しい

い移住の場合と同じく、ここでもまたいうまでもないが、農業が先行し、加工工業がそれに、つづいた。農業生産物の輸出がギリシャ史の全体を通じて重要な意義をもつたことは一度もなかった。そればかりか、逆にソロンの法律によって「その輸出が」制限されてすらいたのであった。むしろ、その法律は「農業生産物の」輸入を奨励していた。成長していく文化とともに絶えず重要な度を増していく鉱産物および工芸品の輸出を通じて、まずアテーナイは豊かとなり、また強大となつたのである。それらの手を借りて仲継貿易をも営んでいた。すでにギリシャはその最盛期にエジプトときわめて巨額にのぼる商業をおこなっていたこと、またそこではギリシャの商人層が自分たちのカストを形成していたことや、世人がエジプトにおける大きな福祉状態の向上を、この貿易に起因するとみていたといった事情のなかに、いかにアテーナイの人々がその当時工業面での彼らの先生格にあたるエジプト人を凌駕していたかということの証拠を提供している。なぜならば、アッティカはどの時代をみても自国の生産物の余剰を生産したことは一度もなかったから、おそらくそのエジプトへの輸出は貴金属類や工芸品にすぎなかつたらうし、それに対して輸入は主として原料、生活必需品、熱帯産の品物などからなりたっていたにすぎなかつたからである。アテーナイの工業がきわめて著るしいものがあったにちがいないという証拠、「一〇〇%といえなくても」少くとも五〇%をくだらぬ証拠は、共和国の大きさのなかに存している。その盛期にあたって、人口は二〇、〇〇〇人の市民、一〇、〇〇〇人の被護民、四〇〇、〇〇〇人の奴隸、「すなわち、総数四三〇、〇〇〇人」をさがらぬ人数が数えられた。アッティカの土地で巨額の輸入なしに「かくも」多くの人口が存在しえたであろうか。また大きな製造業部門がなくて仕事に就く道を発見できたであろうか。製造業者層がこの共同体、*Gemeinwesen*のなかで、いかに尊敬されているかは、デモステネスのごとき著名な市民が製造業を営んでいたことから明らかである。簡単に言ってしまうは、アテーナイのギリシャにお

ける位置は、今日のイギリスがヨーロッパで占める位置にひとしいものがあつた。——最も強大かつ富裕で、しかも文明の発達した自由な国家であつた。アテナイの勢力の基盤は海軍にあつたが、これは彼らの商業によるものであり、このものはまた彼らの鉱業と工業ともつづいていた。加うるに、かの地の状況を評価するにあたって奴隷の果たした役割をどのように多く見つめるかは、上に与えられた自由民と奴隷との人口比から明らかである。すなわちその人口比は一对二〇なのであつた<sup>(4)</sup>（傍点は引用者）。

以上に紹介したリストの「古典古代」論は、つぎに示すような幾つかの点できわめてユニーク、かつ鋭利である。まず第一に、リストでは古典古代の社会構造は奴隷制を基盤とするものであり、東方古代のカスト制を土台とする社会とは、その特質を異にするものとされている。そして、奴隷制を基盤とする古典古代の社会は、生産消費の経済循環を自己の内部で完結させ、その意味で本来それぞれ相互に全く独立した生活単位である強大な家族集団によって構成されていた。リストがここで使用している「家族」は、彼が限定しているように、ふつう常識的に用いられるいわゆる「家族」*Familie*の概念ではなく、むしろ云つてみればわが国の「家」*Hausgemeinschaft*のようなものであり、のちにロートベルトスの名とともに周知の、あの「オイコス」*Oikos* 概念ときわめて酷似した意味内容を有しているといつてよい。<sup>(5)</sup> こうした奴隷制オイコス経営が発達していくならば、その自給自足的自然経済へ指向する本来の傾向からして、「商品流通を欠如する需要充足に終始する下部構造——すなわち、その需要を主に市場でなく、自家経済的に充足する不断に人間を吸収する奴隷複合体（オイコス）」——が、流通経済的の上部構造の下に入りこんでいく<sup>(6)</sup>（ヴェーバー）ことになり、その発達がめざましいほど、商品流通の網の目は自然経済的基底を辛うじて薄く覆うほどに細つていくであらう。まことに、こうしたオイコスで生産される生産物の大半は「彼らの共通の主

人によって各家の農業および工業に使役されている奴隷たちで費消された」のであり、市場の構造はいきおい「裕福なローマ人がもっていたような高級の財貨」すなわち奢侈工芸品、貴金属類などを取引するにすぎぬぞんだ性格を与えられることになる。リストは、このように古典古代における工業マニファクチュアの占める比重に充分な関心をはらいつつも、なお西ヨーロッパの場合とは、その歴史、的意、義をまったく異にしていたと考えるのである。

しかし、それと同時に、リストは古典古代における工業力の特殊歴史的な意義を決して無視していない。すなわち、リストのみるところでは、古典古代（彼はまえに紹介したところで述べているような理由から、もっぱらアテナイをその典型として念頭においている）では手工業者層は社会的に（つまり共同体内で）高い尊敬をうけていたのであつて、それは古典古代の社会が戦士カストによる自由な共同体を経済的土台として組み立てられていたことによるが、したがってまた、共同体内における農・工・商業の関係は生産力の立体的構造が東方古代の祭司カストの支配する共同体の場合とほどか相違していた事情を反映しているのである。リストはこの点を東方古代の社会構造を分析した場合と同じ視角、すなわち土地生産性と労働生産性相互のあいだに示されるシェーレに着目しつつ説明する。古典古代では（彼はギリシャを例にとっているが）「土地の耕作がユーフラテス河やナイル河の沿岸におけるよりも限りなく多く汗の結晶であること、を要求した」（傍点は引用者）のであり、このように土地の自然の肥沃度が東方古代と比べた場合相対的に瘦せていたという歴史事情が、古典古代の農民層に、ともかくにもこの貧しい土地の生産力に対抗しつつ自らをより能率的・合理的性格に鍛えあげる機会を与え、かくて、こうした歴史環境の裡から戦士カストによる「自由な共同体」の成長が可能となつた。<sup>(8)</sup>祭司カスト制度は戦士カストに圧倒されていく。この歴史的道程の行きつくところは、あの古典古代に独自のポリス都市国家の華やかな開花であつた。古典古代が東方古代に

比してより高度の生産力、段階に立脚していたことは、もはや明白である。

以上に整理してみたように、リストは東方古代と古典古代を、一方では土地および労働の生産性如何という面から、また他方ではカスト制と奴隷制、あるいは祭司カストと戦士カストといった面から比較することによって、両者の間の経済的社会的構造の異質性を鋭く画きだしてみせたのであるが、それに加えて、こうした相違を生みだすに至った今一つの歴史的、事情ないし要因の決定的な重要性を指摘している。それは今日の用語をもっていえば、いわゆる「辺境」の問題である。<sup>(9)</sup> リストがギリシヤを「古代世界における北アメリカ」にたとえているのは、おそらく北アメリカが近代世界ではヨーロッパの「辺境」に位置しながら、ヨーロッパの生み落した巨大な生産力を継承して急速に、かつきわめて新しい様相を示す文明を発達させつつある事情を念頭においていたからであろう。事実彼のみるところでは古典古代は、「国家組織・法制・芸術・科学などと同様に、その神々も移住者もアジアおよびエジプトから由来」したものであり、そうした文化遺産（社会的生産力）は、いまや東方古代世界の「辺境」であるギリシヤ・ローマの地で一層勢よく豊かに成長をとげるに至った。リストの適切な言葉を用いるならば、「新しい処女地で文明のあらゆる根本的に新しい芽が、古い国家の土壌におけるよりもさらに豊かな完成した実を結ぶに至ることは、事物の自然に属している」のである。

東方古代と古典古代の相違が、その立脚する経済的社会的土台から解明された以上、「近代の諸民族と同様に、古代の諸民族も主として農業と商業によって富裕となり、文明化され、強大となったのだ」と主張する匿名氏の歴史認識の誤謬が、なかならず彼の商業の本質に関する誤った理解の裡に深く根ざしていることを知るのには、もはや容易なところである。たとえば、ギリシヤの諸都市はエジプトと通商を盛におこない、鉱産物や工芸品の輸出によって富裕

となり強大となつていつたから、一見すると、匿名氏のいうようにギリシャの富裕と強さは、すべて商業の発達に起因すると思ふかもしれないが、実はそうではない。これらの輸出は背後における鉱業と工業の発達に支えられていなければおよそ可能ではなかったし、それはまた土地生産力の貧しさに対抗しつつ形成された農業力によって根本的に規定されていた。ここでも農業は工業に先行する。「商業を営むにはやはりそれでもって交換を達成する何らかの財貨を〔あらかじめ〕所有していなければならぬからである。」<sup>(10)</sup>このようにして交換される財貨は、結局は農業力および工業力の発達から溢れでてくる余剰生産物にはかならないのである。したがって、なるほど「古代ならびに中世では次第に仲継商業によって富と勢力をたくわえるに至った都市や国家というものが個々のには存在した」<sup>(11)</sup>にせよ、「しかし、大きな、自立的かつ封鎖的な国民が形成されて以降というものは、富と勢力の獲得できるこの道は、諸民族に閉ざされているのであり、その後は富と勢力はもっぱら工業力の内的発展に依存しているのである。」<sup>(12)</sup>(傍点は引用者)。こうして、リストは匿名氏が自説を証明する史実としてあげているヴェニスやスペイン、さらにはイギリスの例、をもつぎつぎと論駁してしまふ。なるほどヴェニスの商業史は仲継商業で始まるが、ヴェニスの住民の約半数が製造業者であることから、彼らの工業力がヴェニスの商業および政治力の基礎であったことは、疑問の余地はない。スペインにしても然りである。「スペインの海上勢力とその老大な商業〔活動〕」<sup>(13)</sup>は、かの国の諸都市が工業によつて繁栄した時期から始まったのであり、工業とその没落をも同じくしたのである。「イギリスの近代における発展が羊毛<sup>Wool</sup>毛織物工業の繁栄と歩調を共にしている点は、すでに以前に指摘した通りである。」<sup>(14)</sup>こうして最後に引用した著者〔すなわち匿名氏〕の議論は、すべてにわたつて結局〔立論の基礎が〕まったく弱いことが判明しよう。リストの匿名氏に対する反駁は、こうしてそのすべてを余すところなく完了した。最後に彼は駄目押しのごとくに、「こ

の論証によって読者は、「いまや」この著者〔匿名氏〕が自由貿易体制の熱心な信奉者であることを信じていることができよう<sup>(14)</sup>と、論敵の階級的基盤を暴露して筆をおいている。

以上匿名氏に対するリストの激しい反批判を、若干の説明をつけ加えつつかなり詳細に紹介してみたのであるが、そこには明らかに単なる論争的な言葉の応酬といった時論的象面を遠くこえて、リストがみずからの独自の歴史認識にもとづきつつ再構成した世界史像が、その姿をくっきりとあらわしている。これまでにも繰り返し述べてきたように、本稿の問題も結局はその像を解明することにあるが故に、つぎに、リストがこの論文で示した世界史像の構成を支えている歴史認識の構造をあたう限り浮彫りしてみよう。

(1) F. List, Werke W. S. 452.

(2) リストの「古代経済史」に関する敘述は、直接に古代のオリヂナルな文献を別とすれば、もっぱらヘーレン Heeren の著書 *Ideen über die Politik, den Verkehr und den Handel der vornehmsten Völker der alten Welt*, 1815, 6 Bde. に拠っていることは興味深い。というのは、ヘーレンは古代を扱うにあたって全くスミスのな視角に立っており、いわばスミスを読んだその目で古代を見ているからである。したがって、ヘーレンでは古代は直接に近代と比較されており、中世(＝西ヨーロッパ)の問題は脱落してしまっている。ヘーレンを用いながら、しかもなお古代から近代へではなく中世から近代へ、というかたちで近代的生産力形成の源流を西ヨーロッパという歴史的、個体の裡に求めようとするリストの態度は、啓蒙思想に色濃くいろどられているヘーレンとは異質的なものであり、そこには多くの人によって指摘されているドイツ・ロマンティシズム(正確には、それをも含むドイツ歴史主義)の影響がうかがわれる。まさしく、その点でリストの思想に歴史法学派の始祖メーザーの影が深く落されていることは、ほぼ推察できるところであらう。なぜなら、メーザーこそは近代ヨーロッパ文化の故郷を古典古代にはなく、遙かにゲルマン古代に見いだすことによって、ヨーロッパ中世に独自の意義を附与した当の人であったから。Vgl. J. Möser, *Patriotische Phantasiën*, J. Möser's Werke, Bd. 3, 1)のように見てくるとき、ヘーレンを中にはさむことによつてわれわれはスミスとリストの歴史認識にみられる性格の相違をきわだたせて把握することができるのである。

(3) リストの古代工業に関する省察は、きわめて詳細で、かつ十分に説得力もあり、彼の該博な知識の一端を示している。そこには今日の研究水準からみても興味深い説明が幾つかあるのであるが、それのたち入った検討は本稿の問題からはずれてくるので、ここでは省略することにする。

(4) List, Werke, VI, SS. 456—457.

(5) リストがアッティカのキケロ書簡によりつつ、ギリシャ・ローマ社会の構成単位が奴隷若干を含む家父長制家族共同体であって、しかも、経済的には生産⇨消費の封鎖的完結体であることを指摘していることは、興味深い。古典古代の経済構造を、こうした家経営体の面から把握しようとするアプローチは、これまでは研究史上ロートベルトスのオイコス論に始まるとみられており、オイコス論史としてはむしろリストからロートベルトス・ビュッヒャーへという線が考えられてよいのではあるまいか。なお、上原専祿氏の御教示によれば、スミスは古代についてはコルメラのスクリプツールズを利用しており、それは当時のイギリスではギムナジウムのラテン語教科書として用いられたということである。リストが何故コルメラより難解なキケロを用いたのかは明らかにし得ないが、もしもそれが当時ドイツのギムナジウムのラテン語テキストであったならば、スミスとリストの歴史認識における差異の一端は、両者が青少年時代に受けたドイツ・イギリス両国の教育方法の相違に起因することになり、問題には意外に身近な日常の次元にまで下りてくるわけである。

(6) M. Weber, Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 1924, S. 294.

(7) リストが古典古代では手工業者層の共同体内部における地位が東方古代の場合よりも高かった点を指摘しているのは、まことに鋭い把握といわなければならない。たとえば、大塚久雄「共同体の基礎理論」(岩波書店、一九五五)、六八頁以下の行論参照。エンゲルスもリスト同様に当時のアテーナイにおける手工業者層の政治的地位の高かったことに言及している。F. Engels, Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des States, SS. 110—116, (西雅雄訳、岩波文庫版、一五五—一六一頁)。

(8) リストが東方古代を祭祀カスト制として捉え、これに対して古典古代を戦士カストの「自由な共同体」として理解している点に、とくに注目しておきたい。リストのこうした認識の背後には、匿名氏に批判された工業力(むしろ広く生産力)と自由とは相提携して進むものであるという理念が生き生きと息づいている。彼は、ときには少しく誇張して「民主主義と工業とは同義語である」(註文)といっている。(List, Werke, VI, pr., s. 206, Anm.) 彼が東方古代の工業力が匿名氏の言に反してきわめ

て高度なものであったことを指摘しつつも、なおかつ古典古代の生産力の優越性を確言し得たのは、問題を共同體 Gemeinwesen の局面において把え、その内部構成の自由さと、それに照応する手工業者層の地位の高さに着目したからであり、それは前述の理念に裏打ちされた彼の史眼の鋭さによるものであった。この点は、たとえば古典古代の共同體を、マルクスは「戰士共同體」Kriegerish organisierte Gemeinde と言い、ヴェーバーが「戰士ギルド」Kriegerzunft とよんでいる事実を思えば、充分に納得できることであらう。

(9) リストが「辺境」の重要さを意識したのは、恐らくアメリカ滞在中においてである。リストの「国民的体系」序文でアメリカについて語っている有名な箇所には、この問題も含まれていると考えてよい。資本主義の発展における「辺境」のもつ意義は、すでにレーニンが「ロシアにおける資本主義の発展」で鋭く指摘したところであり、またおよそ世界史の段階的發展にあたって有する「辺境」の意義は、ヴェーバーもしばしば言及し(M. Weber, Agrarverhältnisse im Altertum, G. A. zur Soziol. WG. SS, 99—101, 106—109, 270, usw. 邦訳「一八七—一九一〇」四八九—九〇頁等)、わが国でも石母田正・大塚久雄氏らによって強調されたところである。石母田正「中世史成立の二、三の問題」(歴史学研究會編「日本社会の史的究明」所収)、同「古代末期政治史序説」第三章第一節。大塚久雄「西洋經濟史講座」第一卷緒言参照。

(10) List, Werke W. S. 457.

(11) Ders., a. a. O., S. 458.

(12) Ebenda.

(13) リストがここでスペインの繁栄と衰退を都市における工業の発展および没落において把えている点は、「国民的体系」における歴史敘述の当該箇所と比して一歩進んだ理解といふべきであらう。それというのも、この場合には近代工業力の形成が深く土地制度の問題と関連することに想到し、「農地制度」論を書き下したあと、この眼で見られているからである。リストのこの認識の正しさは、最近の經濟史研究の成果によっても証明されているといつてよい。大塚久雄「近代歐洲經濟史序説」(上ノ一)、弘文堂、七二頁(註)四の説明ならびにそこにあげられている諸文献を参照。

(14) List, Werke W. S. 458.

七 これまで説明を加えてきたリストの歴史認識の構造を、ここで整理し直してみるならば、つぎのようになるであらう。

フリードリヒ・リストの歴史認識について(三)

う。すなわち、大きくみると、リストは匿名氏への反批判で東方古代を、農業力の面から把握するとき土地生産性きわめてたかく、それに対して労働生産性は低位にとどまっているとみ、近代ないしヨーロッパは逆に土地生産性こそ低い、労働生産性ははなはだ高く、古典古代はすべての面で両者の中間もしくは過渡段階にあると考えている。これは「国民的体系」の歴史実用主義的な発展段階論とは明らかに異質的であるが、<sup>(1)</sup>にもかかわらず、彼の「生産諸力の均衡あるいは調和」という立体的構成にもとづく生産力論に立った一種の普遍的な発展段階思想であることは、やはり否み難いところであろう。<sup>(2)</sup>しかし、そうはいっても、リストのこうした歴史認識の構造を段階思想のみで説明しきることには、若干問題がある。というのは、リストの場合古典古代(ギリシャ・ローマ)は「古代世界」における北アメリカといった表現にみられるように、古典古代はあくまでも大きく東方古代とともに「古代世界」に包摂されているものであって、ただ「辺境」に位置している点で、近代ヨーロッパ世界に対する北アメリカに類比されているのである。すなわち、ここでは古典古代は自然的・地理的諸事情に起因しつつ形成される独自の個性をもった歴史的世界として扱えられていることになる。さらに、リストは古代と比較する場合ヨーロッパ近代ばかりでなく、むしろ中世も含めてヨーロッパ世界を問題にしている。<sup>(3)</sup>この場合には古代世界に対比されるのは単純に近代世界ではなく、償越した意味でヨーロッパ世界なのであり、近代工業力の形成を規定した根源的な要因であった農業力の構造は、深く中世以降の歴史的個体としてのヨーロッパ世界のなかで形づくられたものとして理解されているのである。中世と近代は、ともにひとつながりのヨーロッパ世界という歴史的個体の中に包摂されてしまう。ここでもリストの生産力論はヨーロッパを独自の個性をもった歴史的世界とみることによって、定向進化の思想にもとづく一系的・普遍的な発展段階論とはきわめて異質的である所以をみせているのである。<sup>(4)</sup>

ところで、リストがこのように世界史を把握するにあたって、一面では「国民的体系」におけるそれとはニュアンスを異にするにせよ、とにかく一種の段階思想を表明するとともに他面では東方古代、古典古代、ヨーロッパないし近代のそれぞれに、独自の歴史的個性を認めている場合、彼の歴史認識の枠内ではこの両者はいったいどのように整合することができるであろうか。ここにおいて、われわれはさきに匿名氏の批判が特定の歴史観を表明するものであって、その点が単に現実の利害関係をめぐるイデオロギー的抗争に終始させることなく、「さきにあげたリストの農・工・商業力の調和的發展の視角への批判とあいまって、リストの心奥に秘められていた歴史的思考を鋭く触発させることになった」と指摘した事態のもつ意味を検討すべき段階にたち至ったのである。まことにリストの歴史認識における基礎視角は、あの国民経済における「生産諸力の均衡あるいは調和」如何ということにおかれており、そこそ彼の歴史に関する鋭利な分析および評価の一切が、まさしくここから豊かに溢れ出で、またそこへと還帰していくところの源泉なのであった。ところで、「生産諸力の均衡あるいは調和」如何を問うことは、その社会の産業構造(社会的分業の組立て)を問題にすることであり、それは一方では生産力の發展段階を明らかにし得るとともに、他方では生産力Ⅱ分業構造の組成にあたって作用する歴史事情を、いや応なく視野の中に導き入れることになる。したがって、この基礎視角に支えられつつ構成されたリストの歴史認識は、当然に二つの側面を有している。一つは生産力の發展にしたがって、社会構造を段階的に把握しようとする指向であり(この面では古典古代の「過渡段階」性が強調される)、他の一つは歴史事情に作用されつつ農業⇓工業⇓商業の相互関係(Ⅱ生産力の立体的構造)が各社会ごとに相違し、かくて生産力の組成にあたって個性的な構造が打ちだされてくるという理解である(ここでは古典古代の「辺境」性が前面にだされてくる)。いまマックス・ウェーバーの比喩的な表現をかりるならば、両者はいわば

歴史を織りなすたて糸とよこ糸との関係にあるということがいえる<sup>(5)</sup>。もしくは、端的に段階と類型の関係であると  
いってしまってもよいであろう。

リストの歴史認識における二つの面、すなわち段階と類型、あるいはたて糸とよこ糸は、このようにリストの内面ではまったく整合的に統一されていたとみてさしつかえない。そして、この統一の軸心にはリストに独自の生産力論が礎えられていた。それは東方古代・古典古代・近代ないしヨーロッパを土地および労働の生産性の問題とそれに起因する農・工・商業の関係という観点から分析し、近代工業力の形成が遠く土地生産力の貧しさに抗しつづ能動的・合理的に自己形成した農業力に由来する事情を明らかにしたところのリストにおける行論の展開の裡に示されているごとく、生産力の主体的側面からする概念構成という独自の構想である<sup>(6)</sup>。だが、このような生産力の主体的把握は、実は初期のリストにおける歴史意識の形成の問題と根深く関わりあっているのであって、そのためにはあの「南独シユワーベンのデモクラート」として歴史の舞台に登場してきた当時にまで遡って検討を加えなければならないであろう。ここでごく大づかみに要点のみを摘記するならば、こうである。一八一六年以降のあのヴュルテンベルク憲法論争に加わったリストが強く主張した問題の一つは、地方自治の構造改革についてであり、結局それはゲマインデを真の市民的自由の基礎とみなすこと<sup>(7)</sup>にあった。リストはこれを足場にフランス、プロイセン、スイス、イギリス、ヴュルテンベルクの比較史的検討をおこない、すぐれて歴史的な立場からヴュルテンベルクの行政組織を批判している<sup>(8)</sup>。こうした彼の歴史意識は、また彼の市民の自由を求める思想と深く結びついていた。「わたくしはドイツの帝国都市(「ロイトリンゲン」)に生れた。だからわたくしの自由主義は歴史的根源をもつものである<sup>(9)</sup>」。リストによれば、市民的自由は封建社会の解体とともに成立したものであったが、それはゲルマン民族がそもそも始めから有してい

た民族としての共同生活の裡に潜んでいた自由が花開いたものなのである。<sup>(10)</sup> しかも、ゲルマン民族定住の時代に由来する歴史事情がここでも重視され、そこからシュワーベン（＝南独）とザクセン（＝北独）の相違、すなわち前者で市民階級が、後者で土地貴族が優勢である所以が、導きだされている。<sup>(11)</sup> ここには近代の市民的自由がヨーロッパという歴史的世界の独自の個性の裡に、その系譜を辿られているのであって、このような歴史意識に裏打ちされた「自由」は、なによりもまず「国家内の国家」であり、その細胞形態であるゲマインデの中に確保されるべきものであった。されば、国家を構成する市民層の基盤はゲマインデにあり、そのためには「農地制度」論で説かれていたようなエンクローズされた四〇―六〇モルゲン程度の中農場を有する農業市民の階層が、その重要な一翼として形成されていることが必要とされる。もしリストの画くような国家（コモンウェルス）の構成がづくりだされるためには、「農地制度」論で求められたと同じような性格ならびに権利をもつ市民が必要とされるならば、こうした農場制度こそが国家組織の基礎でなければならぬ。<sup>(12)</sup> そして、リストがみずからの構想の実現に手をかすものとして、望み、かつ期待した中農場をもった独立自営の農民層こそは、また工業力を根幹とする老大な近代生産力建設のパン種となったあの社会層とはほぼ同じ性格を有するものと理解され得るのであって、<sup>(13)</sup> いわばそういったヨーロッパ的な精神特性に根ざすこのような「自由」の伝統によって深く陶冶された人間類型が近代生産力建設の担い手として把えられたのである。だから、リストの生産力論においては、歴史的な諸要因に規定されつつ形成された一定の人間類型がまたそれに照応する一定の発展段階に立つ生産力を建設するという因果関連、すなわち生産力の主体的側面からする概念構成への強い指向が存在しているのを看取することができよう。こうして、リストのあの歴史認識にみられたたて糸とよこ糸とは、生産力の主体的把握という通路によつて、統一的に、リストでは把えられることができたのである。リストの生産力論におけるたて糸の

側面が強調された場合が「国民的体系」であるとするならば、よ、この側面は「農地制度」論にあらわれているといつてよく、このような観点から見れば、この両者は一概にリストの矛盾した思想を反映しているとはいえないであろう。<sup>(14)</sup>

こうしてリストは、以上に説明したような構造を内包する歴史認識を通じて、彼の「正常国民」の理念を支える「生産諸力の均衡あるいは調和」の如何が、国民経済の発展段階ならびに類型を決定するという命題を、単に近代史についてばかりでなく、とくに古代経済史に関する分析において鮮やかに証明してみせたのであって、このように見ると、リストの匿名氏への反批判であるこの論稿に、「農業・工業・商業の関係ならびに古代の経済史について」という副題が附されている所以も一層意味深く理解できるように思われる。

(1) 「国民的体系」の発展段階論を「歴史実用主義」Geschichtspragmatik とみたのは、ザリーンである。Vgl., Edgar

Salin, *Geschichte der Volkswirtschaftslehre*, 2 Aufl., 1929, 高島善哉訳「経済学史の基礎理論」(三省堂 一九四四)

一四〇頁。だが、後段で指摘するように、リストの段階思想は別の面から整合的に理解できるのである。

(2) この点は、リストの「アジア」社会に関する興味深い論稿をみるならば、一層明らかなるところである。Vgl., List, *Werke* V, S. 51 f. ただ、すでに段階構成の仕方が「国民的体系」と異なってきたことはいうまでもない。

(3) リストが中世と近代を一括してヨーロッパとして扱えていることには、いうまでもなく鋭い批判が加えられることであろうが、リストのこうした扱え方の背後には、後段でふれるごとく彼に独自の歴史意識が潜んでいるのであって、それはややちがったかたちにおいてはあがあるが、マックス・ヴェーバーの裡にも看取できるものである。たとえば、ヴェーバーの「都市」論に拠る増田四郎氏と、「資本主義の精神」論にもとづく大塚久雄氏との、中世と近代とのつながりに関する興味深い見解の相違を想起されたい。増田四郎「都市」(如水書房、一九五二)、大塚久雄「*「ヨーロッパ経済史」*(弘文堂、一九五六)の該当箇所を参照。なお、筆者もリストのこうした理解の仕方に、最近は次第に同感を覚えつつある。

(4) リストのこうした世界史論を、ヘーゲルの「歴史哲学」と比較するとき、段階構成の酷似に驚かされる。リストとヘーゲル

との共鳴盤は、この点だけではなく、後段でふれるように、ヴェルテンベルク憲法論争にあたっての両者の見解の裡にもみいだされるのである。ヘーゲルの影響下に形成されたマルクスの世界史の段階構成が、なにほどかリストに似ているのも、このようにみてくるとき、ある程度納得できる。問題は、リストとヘーゲルに共通した歴史認識の根基を思想的に解明することにあるが、この点のたち入った検討は別の機会に譲らねばならない。

(5) M. Weber, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, im: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Viele Aufl., 1947 S. 82. 大塚・梶山訳、岩波文庫版(上)ノ一三七頁。ヴェーバーのこの点についての説明は、実は彼の「資本主義の精神」論を理解する上にも充分に重視されて然るべきところなのである。

(6) リストの生産力論を、この観点から再構成して理解しようとする試みは、松田智雄「土地所有と産業資本」(同氏編著「近代社会の形成」、要書房、一九五四)二〇九頁にみられる。ただし、なお指摘したにとどまっているが。

(7) List, Werke, I, S. 103, 205, 209, 302, 381. u. s. w. リストの自由主義を理解しようとするれば、このゲマインデ論まで戻ってこなければならぬ。この点は、小林氏によってすでに充分に説明されたところであり、以下の筆者の敘述も、氏の説明に依るところが多い。小林丹「フリードリヒ・リスリの生産力論」二二八頁以下。

(8) List, Werke I, S. 304.

(9) Ders., Werke III. Reform des Ungarns, S. 483. 「帝国自由都市ロイトリンゲンに生れたリストは、青年時代の初期で早くも市民的共同精神の作用を経験した」(Erna Schulz, Friedrich Lists Geschichtsauffassung, Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 97. Bd., 1937, S. 292.)

(10) リストはメーザーの「オスナブリュック史」によりつづ書き下したドイツ民族史に関する敘述のなかで、シュワーベンの土地制度の中には封建制度をもつても奪い去ることのできなかった古ゲルマン以来の原初的な自由が生きつづけており、「それが市民的自由を再建する支柱であった」旨を述べている。Vgl. Werke I, S. 430.

(11) Werke I, S. 427f.

(12) Gertrud Mayer, Friedrich List als Agrarpolitiker, 1938, S. 101f.

(13) 拙稿「フリードリヒ・リストの土地制度論」(『立教経済学研究』一一の二・三)参照。なお、大月誠「西南ドイツの『農民解放』(『経済論叢』八九の一)の興味深い行論参看。この論文はリスト段階の西南ドイツがなお依然として封建制下にあ

った事情を実証した点で、筆者のリスト解釈に正しく整合する。ただし、リストの構想した農民層が、史上最初に近代生産力を建設したあのヨーロッパのような独立自営農民層と性格を同じくするものか否かには、異論が存するところである。この点は、当時のドイツ資本主義の発展段階に関する一層たち入った研究を通じて、その当否が明らかにされねばならない。

(14) 小林氏は、この両者のあいだに存在する、或る思想上の断層を強調しておられるが、それには充分に首肯されるだけの理由が存在するからでもある。たとえば、小林昇「前掲書」第二章その他の行論参照。しかし、その点だけを強調することになると、リストが「農地制度」論を主観的には依然として「国民的体系」の統編とみなしている理由が充分納得的に説明できないことになるのではないかと。vgl. List, Werke V. S. 542f. 「農地制度」(邦訳)、二二〇頁以下の行論を参照。